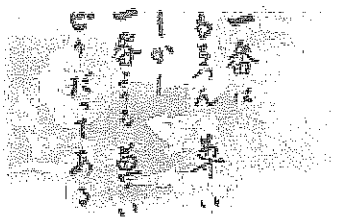
東井義雄記念館
Yoshio Toui Memorial Hall

東井義雄の足跡

足跡
来館案内
館内案内
リンク
トップへ

少年期から青年期



下線のある語句をクリックすると説明が現れます
写真をクリックすると大きな画像を見ることができます

1912年
(明治45年)

◎兵庫県出石郡合橋村(但東町) 佐々木の寺(浄土真宗本願寺派東光寺)の長男として生まれる。

幼少の頃の東光寺

父(義證)が大谷本廟務めであったため、三歳までは京都で過ごす。

生後6ヶ月

1918年
(大正7年/6歳)

◎小学1年生のとき、母(初枝)と死別する。
この時の悲しみ・寂しさを後年次のように記している。

父が不在の時など、母が仏前に座しておつとめをする時そのかたわらで、母をまねて「きみょうむりょうじゅにょーらい」と唱和しながら見上げる時の母のなんとも言えないうれしそうな微笑は、今もあざやかに私の顔前にある。私はそれが嬉しくて母の顔を見い見い体をくっつけてお勤めをしたものである。

後年ずいぶん仏にそむくような思想を追い求めた私であるが、結局そむき切ることができなかったのは、この母の微笑が脳裏にやきついて離れなかったからである。

「わが心の自叙伝」より

1923年
(大正12年/11歳)

◎うどん箱を机がわりに勉学に励み、小学5年生で中学(旧制中学)入試資格試験に合格するが、貧しさのため父の許しが出ず、諦める。

◎関東大震災

1927年
(昭和2年/15歳)

◎どうしても進学の夢は捨て切れず、「一番安く学べる学校」という理由で、師範学校(姫路)に入学。師範学校では全員が何かの部に入らなければならず、東井はマラソン部に入部する。

師範学校時代

しかし、運動の苦手な東井は卒業するまでビリを走りつづけた。ビリを走りながら東井は、「先生になったら運動でも勉強でもビリッ子の心が分かる先生になろう」と決心した。

1928年
(昭和3年/16歳)

◎師範学校2年生の時、漢文の宿題で『独来独去無一随者』のことばに出会い、衝撃を受ける。
「母はとっくに行ってしまった。父もやがて行ってしまう。私もいつか一人ぼっちになる日が来る」この不安から逃れようと、関係書をむさぼるように読む。

心の遍歴は、既にこの頃から始まる。

次「いのちの教育」へ

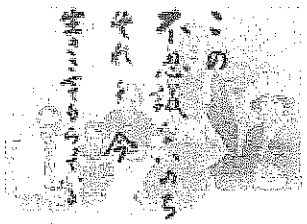
略歴 | 少年期～青年期 | いのちの教育 | 苦悩の時代 | 花開く東井教育 | 仏の声を聞く

東井義雄記念館
Yoshio Toui Memorial Hall
〒668-0393 兵庫県豊岡市但東町出合150 (但東総合支所隣)
TEL.0796-54-1000 FAX.0796-54-1005
E-mail:toui-kinenkan@city.toyooka.lg.jp

東井義雄記念館
Yoshio Toui Memorial Hall

足跡
来館案内
館内案内
リンク
トップへ

いのちの教育に目覚める



下線のある語句をクリックすると説明が現れます
写真をクリックすると大きな画像を見ることができます

1932年
(昭和7年/20歳)
◎優秀な成績で師範学校を卒業し、豊岡市豊岡尋常高等小学校に着任。以来10年間在職する。

1935年
(昭和10年/23歳)
◎理科学習での教え子の質問がきっかけで「ノドチンコ」の働きの神秘さに大きな衝撃を受け、生きているつもりが生かされていることを発見する。

1937年
(昭和12年/26歳)
◎加藤富美代(城崎郡日高町生まれ)と結婚する。

妻

「何もしてあげることができなくて
すみません」
ポツリと
そんなことをいう　妻
「なんにもしてあげることができなくて
すまん」のは　こっちだ
着るものから　たべるものから
パンツの洗濯まで
してもらってばっかりで
「なにもしてあげることができなくて」
いるのは　こっちだ
しかも　妻に
「すまん」といわれるまで
「すまんのはこっちだ」ということにさえ
気がつかないでいた　こっちこそ
ほんとに
すまん。

結婚記念

「東井義雄詩集」より

1937年
(昭和12年)
◎日中戦争開始(～1945)

1938年
(昭和13年/27歳)
◎敬愛する父(義證)と死別。

「この日からどのようにして父の到り着いた世界に迫るかが、私の人生の課題となりました」と自分にとっていかに父が偉大であったかを告白する。

1941年
(昭和16年/30歳)
◎父との死別に前後して愛児の大病に遭遇し、いのちのただごとでなさに気づく。

また、わが子のいのちを通して、受け持ちの子ども60人のいのちのただごとでなさに気づく。

◎真珠湾攻撃／太平洋戦争(～1945)

次「苦悩の時代」へ

略歴 | 少年期～青年期 | いのちの教育 | 苦悩の時代 | 花開く東井教育 | 仏の声を聞く

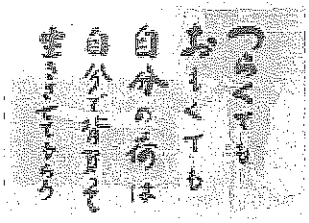
東井義雄記念館
Yoshio Toui Memorial Hall
〒668-0393 兵庫県豊岡市但東町出合150（但東総合支所隣）
TEL.0796-54-1020　FAX.0796-54-1025
E-mail:toui-kinenkan@city.toyooka.lg.jp

東井義雄記念館
Yoshio Toui Memorial Hall

東井義雄の足跡

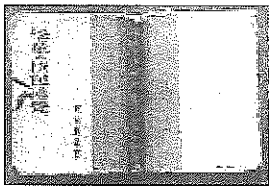
足跡
来館案内
館内案内
リンク
トップへ

苦悩の時代



下線のある語句をクリックすると説明が現れます
写真をクリックすると大きな画像を見ることができます

1944年
(昭和19年/31歳)


『学童の臣民感覚』

『僕らの二千六百年史』と『学童の臣民感覚』を集成し『学童の臣民感覚』として日本放送出版協会より刊行する。

「いのちの教育」に目覚めた東井の教育思想が、この著書の中に凝縮されており、後年発刊される『村を育てる学力』と共に東井の主著であるといえる。

しかし、戦時であったが故に、国家主義思想教育として、戦後、学者などの間で大いに議論を呼ぶところとなるが、東井は臆することなく当時を次のように語っている。

努力しても努力しても戦いになじめず、戦争祈願の神社参拝に参らされても、どうしてもかしわ手がうてなかった私が、遂にかしわ手をうつようになったのは、子どものいのちの中に、本然に民族のいのちの流れを感じるようになったからだ。

おとなたちの戦争協力理論には嘘も感じたが、理くつや思想以前の日常感覚の中に「臣民感覚」とでもいうべきものを感じては、どうしようもなくなってしまった、というのが私であった。こしらえものの思想は信じられなくても、いのちの直接表現である「感覚」の中に「臣民感覚」を見ては、信じないわけにはいかなくなってしまった。そして、そこから私の「本気」の戦争協力が始まった。

だから、私は「もんくをいうな、だまって働け」という戦争指導には、さいごまで抵抗した。「もんくを言わせろ、しゃべらせろ、子どもこそ、正真正銘の日本のいのちなのだ」と叫んだ。

雑誌「教育」99号より

1945年
(昭和20年/32歳)

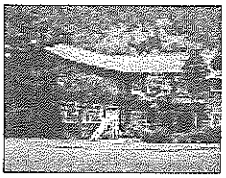
8月15日、敗戦を迎え、再び苦悩の日々が始まる。

1946年
(昭和21年)

日本国憲法制定交付

1947年
(昭和22年/34歳)

相田小学校(小学校時代の母校)に転勤する。その後、14年間勤務する。


相田小学校

その前半は、書くことがあれほど好きな東井であったが、戦争責任を感じ沈黙を守る、いわば苦悩の時代であったといえる。

しかし、見方を変えれば、東井の教育生涯の中で最も地に足のついた教育を実践した時代であったともいえる。

自転車通勤をする東井

その証明が学校通信『土生が丘』であり、やがて発刊される『村を育てる学力』である。

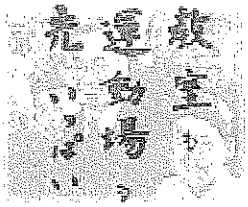
次「花開く東井教育」へ

略歴 | 少年期～青年期 | いのちの教育 | 苦悩の時代 | 花開く東井教育 | 仏の声を聞く

東井義雄記念館
Yoshio Toui Memorial Hall

足跡
来館案内
館内案内
リンク
トップへ

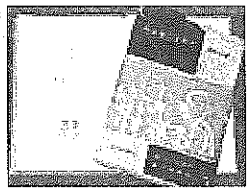
花開く東井教育



下線のある語句をクリックすると説明が現れます
写真をクリックすると大きな画像を見ることができます

1957年
(昭和32年/44歳)

○『村を育てる学力』を出版する


『村を育てる学力』

10年間の沈黙を破った、いわば戦後の処女作であり不朽の名著ともいわれる『村を育てる学力』を発表する。

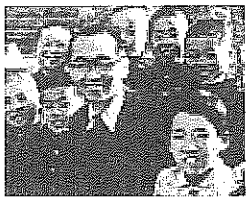
この著書は、東井が谷あいの小さな貧しい村(少年時代の母校)で、子どもたちをど真ん中にすえながら、農民の生き方そのものを問いなおしていく実践の記録である。

また、生活の貧しさのために心まで貧しくなってしまっている村の子どもたちに、何とか『村を育てる学力』を、こんなくらしは自分1代だけでもうたくさんと、子らには都会で暮らすことを夢見させる大人たちに何とか生きがいをと、なお、自らも敗戦の衝撃から立ち上がるための命がけの実践記録であるともいえる。

1959年
(昭和34年/46歳)

○「ペスタロッチー賞」を受賞する。

僻地にあって、常に綴り方教育に情熱を傾けると共に『村を育てる学力』『学習のつまずきと学力』等々に示したすぐれた実践と理論に対する功績により広島大学より「ペスタロッチー賞」を受賞する。


相田小学校の子どもと

終生子どもと共にありたいと願う東井であったが病気休職の校長の後をついで、相田小学校長におしあげられる。

1961年
(昭和36年/48歳)

○但東町立高橋中学校長に就任する。

1964年
(昭和39年/51歳)

○八鹿町立八鹿小学校長となる。

全国から学校参観者が訪れる毎日で、ここでの8年間が教師として名実ともに最も充実した時代であったといえる。

後日発刊される東井義雄著作集別巻『培其根』は、この時代に校長として教職員を個別指導した記録である。

八鹿小学校の
子どもと

校長室で

東井義雄の足跡

仏の声を聞く

下線のある語句をクリックすると説明が現れます
写真をクリックすると大きな画像を見ることができます

1972年
(昭和47年/59歳)

○定年退職で40年にわたる教職生活を終える。

在職中の論文・実践記録を集大成し『東井義雄著作集』を発刊する。

特に別巻『培其根』は、八鹿小学校時代の教員に対する指導の記録を自らガリ版刷りにした異色作で、実践への強い姿勢を表わした名著として、今なお高く評価されている。

昭和50年代

1973年
(昭和48年/60歳)

○退職後は本格的に講演行脚の生活に入り、北海道から九州まで、多い年にはその回数は300回を超えた。

1986年
(昭和62年/74歳)

○体の不調を訴えることが多くなり、検査の結果即刻入院。胃の三分の二を切除する。

目がさめてみたら

目がさめてみたら
生きていた
死なずに
生きていた
生きるための
一切の努力をなげすてて
眠りこけていたわたしであったのに
目がさめてみたら
生きていた
劫初以来
一度もなかった
まっさらな朝のどまんなかに
生きていた

いや
生かされていた

東光寺の庭で

「東井義雄詩集」より

1990年
(平成2年/77歳)

○NHKテレビの「心の時代」に出演し「仏の声を聞く」と題し全国に放送し、大きな反響を呼ぶ。

この時の放送内容が『仏の声を聞く』と題して出版される。これが事実上最後の著書となる。

1991年
(平成3年)

○4月18日午前0時4分、豊岡病院にて逝去。

79歳の生涯を閉じる。